

## 書翰から見る王羲之の像

— 逸民の生活を中心に —

【キーワード】王羲之、書翰、晋朝、隱逸、人間像

### 一 はじめに

「書聖」として有名な東晋の王羲之（三〇三～三六二）の書は、後世、書の手本として珍重されてきた。いわゆる法帖として多くのものが今日に伝えられている。そのうち例えば「十七帖」は、二十条の羲之の書翰を収めたもので、初めが「十七日、先書」で書き出されているので「十七帖」と呼ばれている。今、冒頭の書翰の内容を見てみよう。（注①）

十七日、先書。郗司馬未去。即日得足下書、為慰。先書以具。  
示復数字。

（『右軍』一・『二王』中九）

十七日、先に書す。郗司馬は未だ去らず。即日、足下の書を得て、慰めと為す。先の書に以て具はる。復た数字を示すのみ。

佐藤利行・劉金鵬

すなわち、「十七日、先にお手紙を出しましたが、郗司馬はまだ出発しておりません。（手紙を出した）その日に、あなたのお手紙を受け取り、喜んでおります。先の書に詳しく述べましたので。以上、ご連絡まで」という内容のものである。ここに見える「郗司馬」とは郗曇（三二〇～三六一）のことで、羲之の妻の弟に当たる。郗曇の娘は羲之の子の王献之の妻となった。

咸康六年（三四〇）、羲之三十八歳の時、郗司馬（曇）は司馬昱（簡文帝）が撫軍將軍となった時に、その司馬となった。ついで尚書吏部郎に除せられ、御史中丞を拝した。従って此の書翰は、曇が司馬になった、咸康六年頃に書かれたものであると思われる。（注②）

このように、今日までに残された王羲之の書翰は合わせて七百条に近い数のものがあり、これは王羲之の研究にとっては非常に貴重な資料である。しかし、羲之の書翰は、もともと公開されることを前提にされていなかった、言い換えれば公開されることを前提とした

中国文学の伝統的な文学形式である「書」とは、全く異質の極めて私的なものであるため、その内容を把握することが甚だ難しいものであった。

例えば、書翰に見られる多くの語彙は、いわゆる当時の口語と思われるもので、その意味の把握は難しい。また、文法的にもやはり口語の影響を受けたと想像されるものが多く用いられている。（注③）更に殆どの書翰は、ごく親しい人に宛てたものであり、言わば今日我々が携帯でメールをするが如き感覚で書かれているようである。今、二・三の例を見てみよう。

太尉門左、不可言、同此酸慨。

（『王右軍集』二）

太尉の門左、言ふ可からず、此の酸慨を同にせん。

「太尉の家の人々や部下は、口では言えないほど、この痛ましい思いをともにしていることでしょう」という内容の僅か十一字のこの書翰は、先に見た「十七帖」冒頭の書翰と同様に、王家との関わりの深い郗鑒（郗曇の父）についてのものと思われる。というのも書翰の「太尉」とは三公の一である軍の長官であり、『晋書』卷六七「郗鑒伝」には、郗鑒が劉微の率いる賊軍を討ち、位を太尉に進められたという記述が見えるからである。

また、次のような書翰もある。

桓安西、觀自伐蜀五。（『右軍』四二〇）

桓安西は、自ら蜀を伐つを觀すること五たびなり。

すなわち「桓安西は、自分で蜀を伐つのだと、五回も言っております」という内容であるが、ここの「桓安西」とは、やはり羲之とは関わりの深い桓温（三一二―三七三）のことと思われる。『晋書』卷九八「桓温伝」に拠れば、桓温は庾翼が亡くなった永和元年（三四五）に、安西將軍となり、永和二年十一月に、征虜將軍周撫らを率いて後蜀を伐っている。

このように、書翰の内容を手掛かりとして書かれた時期がおおよそ推測できるものは、二百条ほどである。拙著『王羲之全書翰』の「まえがき」で、次のように書いた。（注④）

もし時期の推定できるものを年代順に排列することができれば、それはとりもなおさず、本人（王羲之）自身の筆によって記された生涯の記録であり、動乱の時代を生きた一貴族の個体史ということになる。そうしてそれはまた、個人の生活記録というだけのものではなく、当時の社会をありのままにえがいたものでもあるから、東晋という時代と社会の、生の記録ということにもなる。

以下、本稿では義之の書翰を主な資料として、『晋書』や『世説新語』等の資料からだけでは窺い知ることのできないであろう王義之像について、特に逸民の時期を中心に、見てみたい。

## 二 王義之の書翰

本稿では王義之の書翰を主な資料として、王義之とはいかなる人物であったのか、その人間像を見て行くのであるが、そもそも七百条にも及ぶ膨大な書翰が、なぜ今日まで残ったのであろうか。

そのことを物語る逸話が『晋書』卷八十「王義之伝」に記されている。すなわち『晋書』本伝には、義之の書が生存中から珍重されていたことを示す次のような逸話が残されている。

又山陰有一道士、養好鷺。義之往觀焉、意甚悦、固求市之。道士云、「為写道德經、当举群相贈耳」。義之欣然写畢、籠鷺而歸、甚以為樂。其任率如此。

又た山陰に一道士有り、好鷺を養ふ。義之往ゆきて焉を觀、意甚だ悦び、固く之を市うらんことを求む。道士云ふ、「為に道德經を写さば、当に群を挙げて相贈るべきのみ」と。義之は欣然として写し畢はり、鷺を籠かごにして歸り、甚だ以て樂しみと為す。其の任率なること此かくの如し。

すなわち、「また、山陰県に一人の道士がいて、好い鷺鳥を飼っていた。義之は出かけて行つてそれを見、たいそう気に入る、どうしても売ってほしいと頼んだ。すると道士は、「老子の『道德經』を写してくださるなら、この鷺鳥を全て差し上げます」と言った。義之は大喜びでそれを写し終え、鷺鳥を籠に入れて歸つて、大変それを楽しんだ。およそ彼の任率（思いのままにふるまうこと）ぶり、このようであつた」というものである。義之が鷺鳥を愛好していることは『晋書』にも他に記載があるが、ここでは道士が鷺鳥の対価として義之の書を欲しがったということで、義之の書は生前からすでに高い評価を得ていたということが分かる。

また、次のような記載もある。

嘗詣門生家、見斐几滑淨、因書之、真草相半。後為其父誤刮去之、門生驚懊者累日。

嘗て門生の家に詣り、斐かやの几ぐゑの滑淨なるを見、因りて之に書し、真草相半なかばす。後、其の父の為に誤りて之を刮けり去られ、門生の驚懊こたする者、累日なり。

「かつて門人の家に行き、斐の木の机の滑らかなのを見て、それに字を書いたが、真書と草書とが相半ばしていた。後にその父が誤つて（その字を）削り去ってしまった。門人は何日もふさぎこんでい

た」というものであるが、ここからも羲之の書が高く評価されていたことが分かる。更に、次のような事も記されている。

又嘗て戢山、見一老姥、持六角竹扇売之。羲之書其扇、各為五字。姥初有慍色。因謂姥曰、「但言、是王右軍書。以求百錢邪。」姥如其言。人競買之。

又た嘗て戢山<sup>しふ</sup>に在りて、一老姥の、六角の竹扇を持ちて之を売るを見る。羲之は其の扇に書いて、各おの五字を為す。姥は初め慍<sup>い</sup>る色有り。因りて姥に謂ひて曰く、「但だ言へ、是れ王右軍の書と。以て百錢を求めんか」と。姥、其の言の如くするに、人競<sup>きそ</sup>ひて之を買ふ。

「また或る時、戢山で一人の老婆が、六角の竹扇を売っていた。羲之はその扇に五文字ずつ書いてやった。老婆は最初に慍<sup>い</sup>りの顔色を見せた。すると羲之は老婆にこう話した、「ただ言え、これは王右軍の書だと。それで百錢で売れるだろう」。老婆が言われた通りにすると、みんな競ってその扇を買った」というものである。

これら『晋書』本伝に記載されている逸話を見れば、羲之の書は当時から甚だ重んじられていたことが十分に理解できる。今日の我々が、有名人や高名な人の書いたものを珍重するのと同じである。こうして恐らく羲之から書をもらった人は、それを大切にしてい

たものと想像される。そのことを示す羲之の書翰がある。

上方寛博多通、資生有十倍之。覺是所委息。乃有南眷情。足下謂何以。密示。一勿宣此意。為与卿共思之。省已、以付火。

（『右軍』三二三）

上方は寛博にして通ずること多く、資生は之に十倍する有り。是れ委息する所なるを覚ゆ。乃ち南眷の情有。足下は何を以てせんと謂ふや。密かに示す。一に此の意を宣ぶること勿れ。卿と共に之を思はんとするが為なり。省<sup>み</sup>已はれば、以て火に付せよ。

「あちらは土地が広く、物資の流通も頻繁で、利益はこの十倍もあります。ここが落ち着き場所ではないかと思えます。そのため南の方へ移ろうとする気持ちがあります。あなたはどうか思われますか。こっそりお話ししているのですから、決して口外なさないように。あなたと二人だけで相談したいと思うからです。ご覧になったら、燃やして下さい」という内容の書翰であるが、一家の長としての王羲之は、王家を支えるための経済についても心を配っていたようである。

さて、この書翰で注目されるのは、「省已はれば、以て火に付せよ」という結びの言葉である。内容が内容だけに、この手紙を燃やすように、という忠告に反して、現にこの書翰が今日に残されていると

いうことは、やはり受け取った人が義之の書の価値を認め、燃やすことが出来なかったのではなからうか。

このようにして、七百条にも及ぶ王羲之の書翰は大切にされ、我々はその内容を知ることができることとなったのである。

### 三 服食養生

『世説新語』言語篇に、

何平叔云、服五石散、非唯治病、亦覺神明開朗。

何平叔云ふ、五石散を服すれば、唯に病を治するのみに非ず、亦た神明開朗なるを覺ゆ、と。

と見えるように、魏の何晏（字は平叔）以来、魏・晋の貴族の間では「五石散」が流行した。（注⑤）この五石散に関する羲之の次のような書翰がある。

服足下五色石膏散、身輕、行動如飛也。足下更与下七、致之不。治多少、尋面言之。委曲之事、実亦□人。尋過江言散。

（『王右軍集』一二）

足下の五色石膏散を服するに、身は軽くして、行動は飛ぶが如きなり。足下は更に七を与下へて、之を致すや不や。治の多少は、尋いで面して之を言はん。委曲の事、実に亦た人を□。尋いで江を過ぐれば言散せん。

すなわち、「あなたからいただいた五色石膏散を服用したところ、身は軽くなり、行動はまるで空を飛んでいるかのようです。あなたはさらに七服分を分けて下さり、送っていただけませんか。治癒の状況については、またお会いしてお話しいたしましょう。詳しい事は、また人を（やります）。そのうちに（彼が）江を渡れば気晴らしをしましょう」という内容の手紙から、羲之自身も五石散を服用していたことが分かる。

この書翰の内容と関連するものとして、次のようなものもある。

追尋傷悼、但有痛心。当奈何奈何。得告慰之。吾昨頻哀感、便欲不自勝拳。且服散行之、益頓乏。推理皆如足下所誨。然吾老矣。余願未尽、唯在子輩耳。一旦哭之。垂尽之年、転無復理。此当何益。冀小却漸消散耳。省卿書、但有酸塞。足下念故言散、所豁多也。王羲之頓首。 （『右軍』一九三・『淳化』三）

追尋しては傷悼し、但だ痛心有るのみ。当た奈何せん奈何せん。告を得て之を慰む。吾は昨頻りに哀感し、便ち自ら勝拳へざらん

と欲。旦に服散して之を行ふも、益ます頓乏す。理を推すに皆な足下の誨ふる所の如し。然れども吾は老いたり。余願の未だ尽くさざるは、唯だ子輩に在る耳。一旦之を哭す。垂尽の年、転た復する理無からんとす。此れ当た何の益あらん。小却か漸く消散せんことを冀ふ耳。卿の書を省るに、但だ酸塞有るのみ。足下言散して、豁くする所の多からんことを念故せよ。王羲之頓首。

「思い起こしては悲しみ、ただ心が痛むばかりです。一体どうすればよいのか。お手紙をいただいてところが慰めました。私は昨日、悲しくてたまらなくなり、とても我慢することなどできませんでした。朝になって服散したのですが、ますます元気がなくなっていました。そのわけを考えてみますに、すべてあなたのお考えの通りです。ところで私は年老いてしまいました。心に残っていることは、ただ子供たちのことだけです。ところが、にわかにその死を哭することになるとは。残りわずかな年齢になり、とても病気が治る望みありません。服薬していったい何の益があるのかと思います。しかし、少しずつでも薬を飲んで治したいと願っているわけです。あなたのお手紙を見ては、ただ悲しみに胸がふさがるばかりです。あなたは気を晴らして大きな気持ちでいるようにして下さい。」

ここに見える「服散」も、或いは五石散を服用することであろうか。いずれにせよ羲之はこうした服薬によって、塞いだ気持ちを晴らすようにしていたのであろう。

これらの書翰以外にも、多くの薬方に関する書翰が残されている。

先生頃可耳。今日略至。遅委悉。知薬公可為之慰。桃膠易得。可以少耶。專一物不移、乃不忠也。充迎不。致意。知陽意事進。願人之善。

（『右軍』三一九）

先生は頃ろ可なる耳。今日、略は至らん。委悉を遅つ。薬公の之が為に慰む可きを知る。桃膠は得易きも、以て少しくす可き耶。一物を専らにして移さざるは、乃ち忠ならざる也。充は迎ふるや不や。意を致せよ。陽の意、進むを事とするを知る。人の善くせんことを願ふ。

「先生は近ごろ元気にしています。今日ぐらいには（そちらに）着くでしょう。詳しい知らせを待っております。薬公も先生に会って安心することと思います。桃膠は手に入れやすいものですが、（使う量は）少なくすべきでしょう。一つの物ばかりを用い続けるのは、よくないと思います。充は迎えてくれますか。お知らせ下さい。陽が仕進する気になっていることを知りました。みんながよくしてくれることを願っております」。

書き出しの「先生」とは、道士の許邁のことである。王家では、もともと張氏の五斗米道（後の道教）を信奉していた。殊に羲之の次男の凝之は、狂信的な信者であり、鬼兵の援助を当てにして賊に



対する備えをせず、賊に攻められて殺されてしまったということが、『晋書』王羲之伝に、次のように記されている。

有七子、知名者五人。玄之早卒。次凝之、亦工草隸、仕歷江州刺史、左將軍、会稽内史。王氏世事張氏五斗米道、凝之彌篤。孫恩之攻会稽、僚佐請為之備。凝之不從、方入靖室請禱、出語諸將佐曰、「吾已請大道、許鬼兵相助。賊自破矣。」既不設備、遂為孫恩所害。

七子有り、名を知らるる者五人。玄之は早く卒す。次は凝之、亦た草隸に工みなり。仕へて江州刺史、左將軍、会稽内史を歴たり。王氏は世よ張氏の五斗米道に事へ、凝之は彌いよ篤し。孫恩の会稽を攻むるや、僚左は之が備へを為さんことを請ふ。凝之は從はず。方に靖室に入りて請禱し、出でて諸將佐に語りて曰く、「吾は已に大道に請ふに、鬼兵もて相助くるを許す。賊は自ら破れんと。既に備へを設けず、遂に孫恩の害する所と為る。

「七人の子があり、名の知れた者は五人であつた。玄之は早く亡くなった。次男の凝之は、また草書・隸書に巧みであつた。仕官して江州刺史、左將軍、会稽内史を歴任した。王氏は代々、張氏の五斗米道を信じていたが、凝之はとりわけ信仰が篤かつた。孫恩が会稽を攻めた時、部下が防備をするように願つたところ、凝之はそれ

に従わず、靖室に入つて祈禱をし、おわつて部屋から出てくると、將軍や属官にむかつて言つた、「私が神にお願ひをして、鬼兵が助けてくれることになつたから、賊はおのずから破れるはずだ」と。こうして防備をしなかつたので、孫恩のために殺されてしまつた」といふものである。

ところで許邁については、『晋書』王羲之伝にその略伝が付されている。

始羲之所与共游者、許邁。字叔玄、一名映。丹陽句容人也。

始め羲之の与共に遊びし所の者に、許邁あり。字は叔玄、一名は映。丹陽・句容の人なり。

と書き出される略伝では、許邁と羲之との関わりについて、次のように記述している。

初採藥於桐廬界之桓山、餌朮涉三年。時欲斷穀、以此山近人、不得專一、四面藩之。好道之徒、欲相見者、登樓与語、以此為樂。常服氣、一氣千余息。永和二年、移入臨安西山、登巖茹芝、眇爾自得、有終焉之志。乃改名玄、字遠游、与婦書告別、又著詩十二首、論神遷之事焉。羲之造之、未嘗不彌日忘歸、相与為世外之交。玄遺羲之書云、「自山陰南至臨安、多有金堂玉室、仙

人芝草。左元放之徒、漢末諸得道者、皆在焉。」羲之自為之傳、述靈異之跡甚多、不可詳記。玄自後、莫測所終。好道者、皆謂之羽化矣。

初め、薬を桐廬県の桓山に採り、朮を餌ひて三年を渉る。時に穀を断たんと欲するも、此の山の、人に近くして、専一するを得ざるを以て、四面に之に藩す。道を好むの徒、相見んと欲する者あらば、楼に登りて与に語り、此れを以て楽しむと為す。常に氣を服し、一氣もて千余息す。永和二年、移りて臨安の西山に入り、巖に登り芝を茹ひ、眇爾として自得し、終焉の志有り。乃ち名を玄、字を遠游と改め、婦に書を与へて別れを告げ、又た詩十二首を著し、神遷の事を論ず。羲之の之に造るや、未だ嘗て日に彌りて帰るを忘れずんばあらず、相与に世外の交りを為す。玄は羲之に書を遺して云ふ、「山陰の南自り臨安に至るまで、多く金堂玉室、仙人芝草有り。左元放の徒、漢末の諸もろの得道者は、皆な焉に在り」と。羲之は自ら之が伝を為り、靈異の跡を述ぶること甚だ多し。詳かに記す可からず。玄は自後、終る所を測る莫し。道を好む者は、皆な之を羽化せりと謂ふ。

すなわち「初め、桐廬県の桓山で薬を採ったときは、朮を食べて三年を過ごした。そのころ、穀物を絶とうと思ったが、この山が人家に近く、それに専念することができないので、四方に藩を作った。

道家の徒で、彼に会いたい者は、楼に登って話をし、それを楽しみとした。常に氣を服し、一呼吸で千余回の呼吸に相当した。永和二年、臨安の西山に移り、岩に登って靈芝を食べて、はるかに仙道を自得し、この地で生涯を終える決心をした。そこで、名を玄、字を遠游と改め、妻に手紙を書いて別れを告げ、また詩十二首を作り、神仙の事を論じた。羲之がここに来ると、何日も帰るのを忘れなかったことはなく、互いに世外の交わりを結んだ。玄は羲之に手紙を遺して、「山陰の南から臨安にかけて、金堂玉室や仙人芝草が多くあり、左元放の徒ら、漢末の諸々の得道者が、皆ここに在る」と言った。羲之は自ら彼の伝記をつくり、数々の靈異の事跡を述べたが、ここに詳しく記すことはできない。玄はその後、どこで終わったかわからない。この道を好む人たちは、彼は羽化昇天したのだと考えた」というものである。

許邁との出会いが何時のことであったかは不明であるが、恐らく羲之が会稽の地にやって来てからのことであろう。

こうした許邁との交わりを通して、羲之は服食養生に努めることになる。羲之の書翰の中には、以下のような薬方に関するものが多いが残されている。

噉豆、鼠傷如佳。今送。能噉不。

（『淳化』三・『二王』上五五）



豆を噉<sup>くら</sup>へば、鼠傷に佳なるが如し。今、送る。能く噉<sup>くら</sup>ふや不<sup>い</sup>や。

「豆を食べれば、鼠傷に効くようです。今、お送りします。食べられますか」という内容であるが、恐らく鼠にかじられた傷を治すのに効果のある豆を義之が教えているのであろう。

石脾、入水即乾、出水便湿。独活、有風不動、無風自揺。天下物理、豈可以意求。唯上聖乃能窮理。 (『三王』中三四)

石脾は、水に入れば即ち乾き、水より出だせば便ち湿る。独活は、風有るも動かず、風無きも自ら揺<sup>ゆ</sup>く。天下の物理、豈に意を以て求む可けんや。唯だ上聖のみ乃ち能く理を窮<sup>きは</sup>む。

「石脾は、水に入れると乾き、水から出すと湿ります。独活は、風が吹いても動かないが、風が無くても揺れ動きます。天下の物の理は、どうして人の心で推し量ることができましようか。ただ聖人のみが理を窮めることができるのです」。ここにある「石脾」は、『本草綱目』石部に「石脾は西戎の鹵<sup>しほ</sup>地に生じ、鹹<sup>けん</sup>水の結成する者なり」とあり、「独活」(うどの一種)については、『本草綱目』草部に「諸々の中風・湿冷を治す」とある。これも義之が薬方について手紙の相手に説明をしているもののようである。

須狼毒。市求不可得。足下或有者、分三両。停須。故示。

(『淳化』五・『三王』上五一)

狼毒を須<sup>もと</sup>む。市に求むるも得可からず。足下、或いは有<sup>は</sup>ら者、三両を分けてよ。停<sup>とど</sup>まりて須<sup>ま</sup>つ。故に示す。

「狼毒が必要です。市場で搜したのですが手に入れることができませんでした。あなたがもしお持ちでしたら、三両ほどお分け下さい。(こちらに) ずっと停<sup>とど</sup>まって待っておりまです。それでお使いした次第です」というものである。「狼毒」は、『本草綱目』草部に「聾<sup>ろう</sup>を治す」とあることから、恐らく義之の所に聾<sup>ろう</sup>を患っている人がいて、薬を待っているのであろう。(注⑥)

このように、王義之は親しい人たちと薬方の情報を共有し、ともに服食養生に努めていたと思われる。

#### 四 目前の娛しき

こうした日々にあつて、義之の心を慰めてくれていたのは、可愛い孫たちであつた。義之には次のような書翰がある。

吾有七兒一女。皆同生。婚娶以畢、惟一小者、尚未婚耳。過此一婚、便得至彼。今内外孫有十六人、足慰目前。足下情致委曲。

故具示。

〔『右軍』二一〇・『淳化』三・『三王』上一〇〕

吾に七兄一女有り。皆な同生なり。婚娶は以に畢るも、惟だ一小者のみ、尚ほ未だ婚せざる耳。此の一婚を過ぐれば、便ち彼に至るを得ん。今、内外の孫十六人有り、目前を慰むるに足る。足下情致は委曲なり。故に具に示す。

「私には七人の男の子と一人の女の子がおります。みな同じ腹から生まれたものです。結婚はほぼおわたのですが、ただ末の一人だけが、まだ結婚していません。この子の結婚がすめば、あちらに行くことができるでしょう。今、内孫外孫が十六人おり、今を楽しませてくれます。あなたのお心づくしに感謝しつつ、お便りしました」というように、羲之にとつて可愛い孫たちは今この時を楽しませてくれるかけがえのない存在であった。

「足慰目前」（目前を慰むるに足る）というのは、羲之の考え方の一端を示す言葉で、次の書翰にも見ることが出来る。

十月七日、羲之報。前過足下、所得其書、想殊有勞弊。然叔兄子孫有数人、足慰目前情。……〔『淳化』四・『三王』中四七〕

十月七日、羲之報ず。前に足下に過りて、得る所の其の書、想ふに殊に勞弊有り。然れども叔兄は子孫数人有り、目前の情を慰む

るに足らん。……

「十月七日、羲之報ず。以前、あなたの所に立ち寄つて受け取った、先方からの手紙によれば、ことに苦勞が多いように思われます。しかし叔兄には子や孫が数人あり、目前の情を慰めるのに十分でしょう。……」。

次の書翰にも「娛目前」（目前を娛しむ）と見えている。

古之辞世者、或被髮佯狂、或汚身穢迹。可謂艱矣。今僕坐而獲免、遂其宿心。其為幸慶、豈非天賜。違天不祥。頃東遊還。修治桑果、今盛敷榮。率諸子、抱孫、遊觀其間。有一味之甘、割而分之、以娛目前。雖植德無殊邈、猶欲教養子孫、以敦厚退讓、戒以輕薄。庶令拳策數馬、彷彿萬石之風。君謂之何如。遇重熙去。當與安石、東遊山海、併行田、盡地利。願養閒暇、衣食之余、欲與親知、時共飲讌。雖不能興言高詠、銜杯引滿、語田里所行、故以為撫掌之資。其為得意、可勝言耶。常依陸賈班嗣楊王孫之処世、甚欲希風數子。老夫志願、盡於此也。君察此。當有二言不。真所謂賢者志於大、不肖志其小。無緣見君。故悉心而言、以當一面。

〔『右軍』三一五〕

古の世を辞する者は、或いは被髮佯狂し、或いは身を汚し迹を穢す。艱しと謂ふ可し。今、僕は坐ながらにして免るるを獲、其の

宿心を遂ぐ。其の幸慶為るや、豈に天賜に非ずや。天に違へば不祥なり。頃ろ東遊して還る。桑果を修治し、今、盛んに菜を敷く。諸子を率ゐ、孫を抱き、其の間に遊観す。一味の甘き有らば、割きて之を分ち、以て目前を娛しむ。徳を植つること殊に邈かなること無しと雖も、猶ほ子孫を教養するに、敦厚退讓を以てし、戒むるに輕薄を以てせんと欲す。庶はくは策を挙げて馬を数へ、萬石の風に彷彿たら令めんことを。君、之を謂ふこと何如。遇々重熙去る。當に安石と、東のかた山海に遊び、併せて田を行なひ、地の利を盡くすべし。頤養の間暇、衣食の余、親知と、時に飲讌を共にせんと欲す。言を興して高詠し、杯を銜んで満を引くこと能はずと雖も、田里の行なふ所を語るに、故より以て撫掌の資と為す。其の得意為ること、勝けて言ふ可けん耶。常に陸賈・班嗣・楊王孫の処世に依り、甚だ風を数子に希はんと欲す。老夫の志願、此に盡くる也。君、此を察せよ。當た二言有るや不や。真に所謂、賢者は大を志り、不肖は其の小を志るなり。君に見ふに縁無し。故に心を悉して言ひ、以て一面に當てん。

「古の俗世に別れを告げた者は、髪をふり乱して狂人をよそおったり、わが身やわが行ないを汚したりしました。これはなかなか出来ることではありません。ところが今、私はいながらにして俗世から逃れることができ、かねてからの懐いを遂げました。この慶びは、天からの賜り物ではないでしょうか。天命に逆うことは不吉です。」

さて、近ごろ東の方を遊覧して帰りました。桑の木を植えておいたのが、今やりっぱに育っています。子供たちを引き連れ、孫たちを抱きかかえては、その間をながめまわっております。何かうまいものが有れば、みんなでそれを分けあつて、この目前を楽しんでおります。私はとりわけすぐれた徳はありませんが、それでも子や孫たちに敦厚と退讓を教え、輕薄を戒めるようにしております。できますならば、策を手にしていちいち馬を数えたという万石君の家風にならいたいと願っております。あなたはこのことをどのように思われますか。たまたま重熙が（西に）行きましたので、安石と東方の山海を遊覧し、ついでに莊園を見てまわり、田をちゃんと作らせるようにしようと思います。養生のひまができ、生活の余裕ができたならば、親戚の者や知人たちと一緒に飲談したいと思っております。立派な言葉を述べ、高らかに歌いあげ、盃をふくんで飲みほしたりすることはできなくても、田舎でのくらしを語り合えば、手を撫って談笑する種にはなるでしょう。その満ち足りた気持ちとは、とても言いつくせないでしょう。いつも陸賈や班嗣・楊王孫の処世術を参考にし、これらの人たちの風にならいたいと望んでおります。老いばれの私の願いは、ただこれだけです。あなたもお察し下さい。心にもないことは言っておりません。本当に、所謂「賢者はその大きなところを知っており、不賢者はその小さなところを知っており」というものです。あなたにお目にかかるすべがありません。それで心のたけを述べ尽くし、拜眉に代える次第です。」

この書翰は、『晋書』本伝にも、「吏部郎謝万に書を与えて曰く」として載せてある。書翰の中で、「諸子を率ゐ、孫を抱き、其の間に遊観す」というように老年を迎えた羲之にとっては、家族と過ごす時間は何より楽しいものであった。特に幼い孫たちは羲之にとって、かけがえのない存在であった。

## 五 孫の夭折

しかし、その可愛い孫が夭折するという、この上もない悲しい出来事に羲之は見舞われる。

官奴小女玉潤、病來十余日、了不令民知。昨來忽發病、至今軋篤。又苦頭癰、頭癰以潰、尚不足憂。痼病少有差者、憂之焦心、良不可言。頃者、艱疾未之有。良由民為家長、不能剋己懃修、訓化上下、多犯科誡、以至於此。民惟婦誠待罪而已。此非復常言常辭。想官奴辭以具。不復多白。上負道德、下愧先生。夫復何言。

（『三王』上二八）

官奴の小女玉潤は、病み來たりて十余日なるに、了く民をして知ら令めず。昨來、忽ち痼を發し、今に至りて軋た篤し。又た頭癰に苦しむも、頭癰は以に潰れ、尚ほ憂ふるに足らず。痼病は少しく差ゆる者有るも、之を憂ひて心を焦ましむること、良に言ふ可

からず。頃者、艱疾は未だ之れ有らず。良に民は家長と為るも、己に剋ちて懃め修め、上下を訓化する能はずして、科誡を犯すこと多きに由りて、以て此に至るなり。民は惟だ誠に歸して罪を待つ而已。此れ復た常言常辭に非ず。想ふに官奴辭げて以て具にせん。復た多くは白さず。上は道德に負き、下は先生に愧づ。夫れ復た何をか言はん。

「官奴の少女の玉潤が、病氣になってから十数日になりますのに、私には全く知らせがありませんでした。昨日から突然に持病が悪くなり、今はいよいよひどくなっております。その上、頭のできものに苦しんでおりましたが、できものは已につぶれてしまい、もはや心配するには及びません。持病も少しはよくなっていたのですが、やはり心配で落ち着かず、本当に口では言えぬほどでした。近頃、こんなにもやつかしい病氣は見たことがあります。これもまことに私が家長でありながら、我が身をつつしむ修養して、家族の者たちを訓化することができず、誠めを犯すことが多かったから、このようなことになってしまったのです。私はただただ誠心誠意、罪を待つだけです。これは口先だけで言っているわけではありません。官奴がすでに詳しく申し上げていると思いますので、もう多くは申しません。上は道德にそむき、下は先生に愧ずるばかりです。もう何も申せません」という内容の手紙であるが、「官奴」すなわち王献之の娘の玉潤が治療を受けていた道士の先生に宛てたものであ

う。幼い孫娘の死に遭遇して、義之の悲しみはいかばかりであったろうか。

延期官奴小女、並得暴疾、遂至不救。慙痛貫心。奈何。吾以西夕、至情所寄、唯在此等、以荣慰余年。何意、旬日之中、二孫天命。旦夕左右、事在心目。痛之纏心、無復一至於此。可復如何。臨紙咽塞。

（『右軍』一七六）

延期・官奴の小女は、並びに暴疾を得て、遂に救はれざるに至る。慙痛は心を貫く。奈何せん。吾は西夕を以て、至情の寄す所は、唯だ此れ等に在り、以て余年を榮慰せんとす。何ぞ意はんや、旬日の中、二孫の天命せんとは。旦夕左右、事は心目に在り。痛みの心に纏るや、復た一に此に至る無し。復た如何にす可き。紙に臨んで咽塞す。

「延期・官奴の幼い娘は、どちらも急に病気になる、そのまま命を救うことができませんでした。この痛む心はどうすることもできません。私は残り少ない歳になり、ただこれらの孫たちが楽しみで、余年を慰めようと思っておりましたのに。旬日の中に、二人の孫娘が幼くして亡くなってしまおうとは、思ってもみませんでした。いつでもどこでも、そのことばかり思い出されます。痛みが心にまつわりつくこと、これ以上のものではありません。一体どうすればいい

いのでしょうか。この手紙を前にして、咽び泣くばかりです」。冒頭の「延期」とは、王延期のことで、義之の兄の籍之子である。（注⑦）こうした身内の、それも幼い孫娘が死んでいくという悲しみを経験し、義之はよりいっそう今の時を充実して生きて行こうという思いが強くなっていったと想像される。

## 六 まとめ

今回は、王義之の書翰を中心として、「服食養生」「目前の娛しみ」「孫の夭折」という観点から、その人間像を考察した。書翰は義之みずから書いたものであるから、当然のことながら、そこに書かれたことは義之の心の思いであったに違いない。しかし、「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」（『易経』）というように言葉で表現された、その中にある真意を読み取ることは相当に難しい。多く残された義之の書翰を相互に関連付けて考え合わせることで、少しでも義之の心の思いに迫ることが可能となる。

また、王義之を研究するためには、『晋書』『三国志』およびその注、『世説新語』およびその注、『真誥』などの資料があるが、こうした資料と義之みずからの手になる書翰との関連付けを丁寧に行うことによって、より詳しく王義之の人間像が浮き彫りにされるはずである。今後、更に真の王義之像に迫るべく考察を重ねたい。



## 【注】

①本稿で取り上げる書翰については、唐・張彦遠輯『右軍書記』（津逮秘書本『法書要録』所収）、清・乾隆三十四年勅輯『淳化閣帖』（広雅書局刊『武英殿聚珍版』所収）、宋・許開撰『二王帖評釈』（横山草堂叢書『所収』）、明・張溥輯『王右軍集』（漢魏六朝一百三家集『所収』）を用いた。

②書翰がいつ頃書かれたものであるのかについては、その内容によって推測することが可能である。詳しくは佐藤利行「王羲之書翰繫年考証」（『国文学論集』安田女子大学、第一四卷、一九八六年）を参照。

③佐藤利行「王羲之書翰の語彙」（『広島大学大学院文学研究科論集』第六九卷、二〇〇九年）、佐藤利行「六朝漢語の研究」（『安田女子大学紀要』第一四卷、一九八五年）を参照。

④森野繁夫・佐藤利行『増補改訂版王羲之全書翰』（白帝社、一九九六年）では、書かれた時期の推測できる二百三条を、

一 会稽内史になるまで（～四十九歳）

二 会稽内史の時期（四十九歳～五十三歳）

三 会稽の逸民（五十三歳～五十九歳）

の三期に分けて上巻とし、書かれた時期のはっきりしないものについては、内容によって分類し、

一 問好・時候の挨拶

## 二 諸事の連絡

## 三 家族・一族内の諸連絡

にまとめて下巻とした。

⑤佐藤利行「王羲之と五石散」（『広島大学大学院文学研究科論集』第六五卷、二〇〇五年）を参照。また「五石散」については、魯迅『魏晋風度及文章与藥及酒之關係』（一九二七年）に詳しい。

⑥「聾」に関連する内容の書翰としては、

天鼠膏、治耳聾。有驗否。有驗者、乃是要藥。（『右軍』一一）  
天鼠膏は、耳聾を治すと。驗有りや否や。驗有ら者、乃ち是れ要藥なり。

「天鼠膏は、耳聾を治すということですが、効き目があるでしょう。かし、効き目があるとすれば、大切な薬です」という内容のものがある。王弘の「十七帖述」には「凡そ鼠胆は能く耳聾を治す」とある。

⑦羲之の兄の籍之、その子の延期については、森野繁夫『王羲之伝論』（白帝社、一九九六年）を参照。



## The Human Figure of Wang Xizhi in His Epistles

Toshiyuki SATO and Liu JINPENG

Wang Xizhi's epistles are considered to be personal documents that record his life, as well as an individual history of the aristocracy during the unquiet times of the Jin Dynasty. In addition, the epistles are valuable records describing the society of the time in a frank manner. Many facts can be learned from the epistles that have never been mentioned in historical books such as *Jin Shu* and *Shi Shuo Xin Yu*. In this paper, the authors utilize Wang Xizhi's epistles to explore the situation of his life during his hermit period.